

犬井ねこ

いの。泳いでいるような、揺蕩っているような、それははたまた溺れるような、曖昧で漠然とした感覚なのだけれど、きっとそれは、確実に、私の周りに満ち満ちて私の心を揺らしてた。

女達 とぶん。

僅かな間

女1 ……あなたを愛している私
 女2 ……あなたに愛されたかった私
 女3 ……それでもあなたを愛していた私
 女4 ……本当はあなたを愛していた私
 女5 ……医者、或いは私
 男 ……私の愛している、あなた

女1、海岸に立っている／波の音

女2・3・4、並べられた水槽の様立っている

男、客席に背を向け佇んでいる

女5、それらを観察するかのように立っている

まるでさざなみのように、女達の歌声が響く

開演

女1 その時。

女1、履いていたハイヒールを脱ぎ、海の中へ飛び込む

女1 その時私は水を見ていました。目の前に流れる水を見ていました。ねえ不思議だね、水の色。ほんとは無色で透明の筈なのに、私の心持ちによって、それは青にも緑にも、時には別の色にすら見えるんです。水はくるくる色を変え、私の心も色を変え、揺れて震えて揺らぎ続ける。水を動かす私の心、不思議なことに口ではちつとも上手に説明できなくて、誰かに伝える手段すら、私は少しも持たな

女1 器の話をしましょう。私という器、私という鉛の心の話です。

女1 その時私は水を見ていました。私は確かにその中で、息づいていました。水の底に芽生えた緑の、それでもきつと酸素がなければ生きて行かないように私はきつと、

男 あの

男 すみません、お取り込み中でしたか？

女1 ……はい、お取り込み中でした。何を取り込み中だったのでしょうか、それは酸素でしょうか。酸素を取り込んで、私は泡を吐くのでしょうか、ぼつぼつと、泡を吐くのでしょうか。泡のように、言葉を吐くのでしょうか。

女1 大丈夫です、

男 ……。

女1 はい。

男 お好きですか。

女1 ……。

男 こう言うの。

女1 ……はい、好きですね私。こう言う、水槽みたいなのは。

男 ……。

女1 うまく言えないのですけど、

男 ええ。

女1 重力を、忘れます。私。

男 重力。

女1 そうです、この時だけ、重力を忘れる、私。

男 いいですね

女1 そうですか

男 重力を忘れて水の中で心を揺らし、揺蕩つ。

女1 そうですね。

男 憧れます、とても。

女1 ……

男 ぼくたちは、地べたに縛り付けられて、醜く這いずり回るけもの。解放されたかったです。いや、違うかな、逃げたかったのかな

女1 ……

男 ぼくはね、

女1 待って。

男 逃げたんだ、

女1 待って！

男が踏み切りに近付いていく／電車の急停車の音

女1、耳を塞ぐ

女5 いらっしやいませ。

女1 え。

女5 何をお探ですか。

女1 あの、

女5 (水槽を見る)

女1 ネットで見て、綺麗だな・って。でも、難しくてあんまりわからなかったから。

女5 アクアリウム・と言います。

女1 ?

女5 こう言う水槽のことね、アクアリウム・と言います。

女1 アクアリウム。

女5 熱帯魚用の水槽であることが多いです。川や池、沼などの水辺を模して

造られます。

女1 (見る)

女5 洗われるようでしょう。

女達 心が、

女1 心が、

女5 ええ、心が、それと、

女5 澱みきった、全ての物事が。

女1 よく。

女5 そうですか、

女1 急ぐので。

女達 少し、話していかれませんか。

女1 でも、私、

女達 そんなに急ぐことないでしょう。

女1 急いでるんです。

女達 何を。

女1 ……。

女達 何をそんなに急いでいるんですか。

女1 私は、

女1 お話、聞かせてください。

女5 あなたの話を。あなたという、器の話を。空っぽの器の話を。

女1 ……。

女5 気に障りましたか、空っぽ・という言い方は。

女1 多少。

女5 違うんですか？

女1 ……。

女5 本当に、空っぽでは、ない。

女1 それは。

女5 それは？

女1 確かにそれは、私と言う器は、満たされている、とは言えないのかも知れませんが。でも空っぽとは違う気がしました。それはもしかしたら私の希望的観測に過ぎなかったのかもしれませんが。

僅かな間

女5 (小さく笑う)

女1 ……なんで、

女5 失礼しました、言い過ぎましたね。

女5 ……あなたはね、コレです。

女1 へ？

女5 水の入った器。水の入った肉の器。

女1 ……。

女5 たくさんの水槽が並んでいるでしょう。

女1 はい。

女5 その全てが、あなたです。

女1 え？

女5 そして同時にその全てがあなたではない。

女1 意味がわかりません。

女5 そういうものです。そして例えあなたがわからなくても、全てが流れて

いく。

女1 残酷ですね。

女5 話していかれませんか。

女1 私、行かなくちゃ。

女5 そうですか。

女5、クラップ

女達

と。ぷん

ぶくぶくぶく／泡のようにしゃべりだす女達

女2 思ったよりも冷たくないのね。

女達 そうかな？

女3 私は冷たい。

女1 静かに、穏やかに、委ねるように。意外にも衝撃は無かったと思う。途端に襲ってくるたくさんの情報。音、匂い、味。私の今まで全く知らなかった世界がそこには広がっていた。

女1 探るように慎重に沈下、ついで浮上。ゆらゆらと震える明かりの揺らめき、まるでハロゲンランプの残滓のような光の粒が輝きながら上って行く。弾ける。溶ける。泡になって。

女1 泡に、なって。

女5 泡に？

女1 え？

ぶくぶくぶく

女2 えー。あなたは？

女達 よくわかんない。

女3 ちよっと怖いな。

女2 怖い？

女4 怖くはないよ

女2 どちらかと言えば安心かな

女3 わっかんないなあ。

女4 怖くはないけど穏やかでもない

女2 えー、あなたは？

女達 よくわかんない。

女4 えー

女2 曖昧。
 女3 あいまい
 女1 あいまいみーまいん。
 女4 何それ。
 女2 ゆーゆあゆーゆあーず
 女4 だから何。
 女3 忘れたの？
 女2 覚えてないんだ？
 女4 知らないの。
 女1 うそばっか。習ったよ、中学ん時さ。
 女4 そうだっけ。
 女2 英語の授業。
 女4 ああ。
 女3 わかんじゃん。
 女1 まあ、音だけで言われるとね。
 女2 一理ある。
 女3 確かに。
 女4 でしょ？
 女3 でもダッサ。
 女4 うるさいな。
 女1 しーはーはーはーず
 女2 ひーひずひむひず
 女4 懐かしいね。
 女3 うん。
 女1 私たちは泳いでいました。
 女1 私たちはまるで魚になったみたい泳いでいました。
 女1 あいまいみーまいん
 女2 ゆーゆあゆーゆあーず
 女3 しーはーはーはーず

女4 ひーひずひむひず
 女1 そうしてまるでぽつぽつと泡を吐くように、水棲生物の歌をうたっていました。

ぶくぶくぶく

男と女5は水槽を見ている。

同じ場所に立っているが同じ空間にはいない

女1 これから、器の話をしましょう。私という空っぽの器の話です。

女1・2 あなたに愛されたかった、私

女1・3 それでもあなたを愛していた、私

女1・4 本当はあなたを愛していた、私

女1・男 愛してる、愛してる、愛してた

女達はまるで魚の群れのように泳いでいる

■女2の場合■

女1、更に海の中へ沈んでいく

女5、女1のハイヒールを手にとって、こつこつと音を鳴らす

魚群の中から、女2が声を上げる

女2 ねえ私思うのだけれど、目が二つあるって、すごく画期的なことなんじゃないでしょうか。

女2 今更なんでそんなことを・って思いました？そうですよ、そうなりますよね、わかりますその気持ち。だって、殆ど全てのイキモノは、目を二つ持っている。哺乳類、爬虫類、鳥類魚類両生類。私たちがイキモノ・と認識できる殆どのは押し並べて、目を二つ持っています。

女2 それ、何でかなーって、考えたことありますか、私はありません。答えは出

ませんでしたけど。

女2 きっと、色んな見方があるんでしょうね。例えばそれは、生物学者からの視点。進化論の名の下に、面白い話が聞けると思いますが。それから例えば数学者。視野と角度と数字を混ぜて、きっと私にはわからないほどの高度な理論を繰り広げてくれるでしょう。宗教学者からは、ありがた過ぎて欠伸が出るほどの、

女5、女2を男の前へ連れて行く

女の回想、夢

男 好きなんですか。

女2 え？

男 お好きなんですか。

女2 何ですか。

男 いえ、ボク好きで、こういうの。ここ来る度見てるんですよ、飽きることなく。

女2 そうですね、好きです、私も。

男 一緒だ。

女2 どうして？

男 洗われるような気がして。

女2 何が

男 心。それと澱んでいた全ての事柄が。

女2 一緒だ。

男 羨ましい。ボクとは違う。地を這うけもののボクとは。

女2 一緒だ。

女2 一緒だ、そう思いました。私とあなたはよく似てる。きっと似すぎている。勿論、姿形や見てくれや、そう言うモノを言うのではなく、でもただはつきりとそう思いました。

男 きっと、君とボクはよく似ている。

女2 そう、思いました。

男は女2を抱き締めている
女達の心の中

女3 なにそれやだ！

女4 なんかダメな感じぶんぶんする！

女2 そんなことないよ。

女4 見る目ないんだからさ。

女3 そうそう

女2 なにそれ、あなたたちに言われたくないし

女3 その言い方ひっと

女4 傷付くわー傷付いたわー

女2 何がよ

女4 私のハート。

女3 ハート様！

女4 ガラスのハート。

女3 ハートマン軍曹！

女4 茶化さないでよ。

女3 茶化してないよ

女2 馬鹿みたい。

女4 えー。

女3 ひっと

女2 何がガラスよ、言うて強化ガラス

女4 防弾仕様？

女3 丈夫過ぎない？

女2 水族館の水槽みたいなの。

女4 水槽・ね

女2 そう。だって、

女3 結局そこかあ

女4　ほんと。笑っちゃうね。

女2　いいの。だってそうすれば世界は歪んでしまうから。

二人　え？

女5　アクアリウムなら、ガラスの水槽がお勧めです。

女5　なんといいっても、経年劣化が緩やかです。もともとの透明度自体はアクリルの方が高いんですが、ガラスは経年で透明度が落ちませんから、いつまでも、綺麗なまままで観賞できますよ。

女2　（商品を吟味するような、聞いているような、返事も曖昧）

女5　アクリルに比べて確かに重量はありますが、傷がつきにくい、丈夫さがあります。

女5　現実的な話ですが、お値段もお安いですしね。

女5　ただし、衝撃には弱いです。とても脆い。稀にですが大型の魚が叩き割ることもあります。

女2　分厚いガラスの水槽を透かしたその向こう、私はあなたを見ていました。

女2　歪んで見える、そのわけは、ガラスの厚さのせいなのか、それとも澱んだ頭のせいか、イマイチはつきりしてなくて、ただひとつだけ言えるのは、あなたの笑顔も私の心もきつと全部が歪んでいた。

女2の歪んだ視界を通して男が見えている

男が、女2にしたのとおなじように別の女の肩を抱いている

女2　そうなんです。ずっと前から、知っていた筈でした。現実には私の見たいものだけを見せてくれるわけではない。それどころか、

女5　見たくないものを

二人　見たく　ない　ものを

女2　そう、積極的に。

女1　知っていた。

女2　でも私は、知らない・

二人　しらな—い

女2　と思っていたかった。知ってしまったえば全部終わりだから。

二人　なにを

男　何を？

再び、女2の夢

女2　え

男　何を、知りたくないの？

女2　……。

男　ボクには、教えてくれない？

僅かな間／すれ違うような重苦しい時間

女2　……言ったって仕方ない

男　どうして

女2　別に

男　ねえ

女2　何

男　なんで、そんなに遠いの

女2　怖いだけ

男　そっか

女2　あなただって

男　え

女2　なんでそんなに

男　怖いだけ

女2　うん、

女5　怖いんですか。

女1・2　そうです、怖い。

女5　好きなんでしょう

女2　そうですよ、好きです。だって、心がとても、（水槽を見て）だから、私、好きです。

女1　だからこそ、余計に怖いんでしょう。

女2　……

女1　知っているよ、好きだからこそ、怖いだ。見たくないものを見てしまうのが。

女2　私の片目は現実逃避、私の片目は自傷癖。見なきゃいけないものから目を逸らしてしまう、臆病な片目と、見たくないものをそれでも見ってしまう、我儘な片目。

女2　目が、二つあってよかった。心からそう思いました。

女2　だって片方の目を覆ってしまっても、もう片方の目で、あなたを見つめることができる。探すことができる。

女2　私にとっては、すごく大切なこと。

女達　うそつき

女2　え。

女達、さざなみのように

女2　うそつき？ 私？

女3　うそつき

女4　本当は？

女3　本音は？

女1　音を聞かせてよ、本当の音。

女2　ほんとは。

男　怖いけどさ、

女2　うん

男　怖いって言うのは、恐怖って言うのは、その対象を知らないからこそ起こる感情なんだ。

女2　（笑いながら）うん

男　だからさ、きっとボクたちは、もっと近付かなきゃならない。

女達　ない

男　お互いを知らなきゃならない。

女達　しらなーい

男　ボクたちはよく似ているけれど、やっぱり違う人間だから。勿論それはとても怖いことだけど、怖いからこそ。だろ。

女2　近くに。

男　ほら。

女2　遠いよ。

男　近付こう。

女2　だめだよ、怖いもの。見たくないものが見えてしまうことの方が、そうして傷つけあってしまうことの方が、怖い。

女2　あなたは。

男　ボク？

女2　あなたは、見ているの、私のこと

男　見ているよ

女2　近付こうとしているの

男　もちろん

女1・2　うそつき

男　嘘じゃない

女達　うそつき

女2の夢の終わり

女2、キッチンの包丁で男の腹を刺す

女1　ほら、やっぱりね。嘘じゃない。

女2　……

女2の夢がさめる

女2 ごめんなさい、私、嘘をついていました。

女2 私ね、本当は、両目を抉り出してしまいたかったんです。もう何も見なく
ていいように。見えないフリ、しなくてもいいように。

女2 だから私、心の目を、抉ることにしました。考えるな、感じろ、って言葉あ
るじゃないですか。

男 さんはい

女2 心の瞳でー君を見つめればー愛することーそれがーどんなことだかー
わかりかけてきた(歌う)って歌、あるじゃないですか。結局大事なのは、心・だ
と思うんですよね。心の目・だと思うんですよね。だから、心の目を失くしてしま
えば、私はきつと楽になる。

男、女の夢をはたく
病院にかわる

女5 楽になりましたか？

女2 え？

女5 いらっしやい。どうぞ。

女2 はい。

女5 如何ですか、少しは楽になりましたか。

女2 ……

女5 今日は、何だか元気がないですね。

女2 そうでしょうか、

女5 はい。

女2 いつもと、そんなに変わらないと思うんですけど。

女5 静かですね。

女2 ……

女5 海が、静かです。

女2 海？

波の狭間に、男の幻影が過る

女5 波は、起きていますか？

女2 波・ですか

女5 涙は。

女2 ちよっと、よく、
そうですか。

女5

僅かな間

女2 ……(水槽を見ている)

女5 お好きなんですか？

女2 え？

女5 お好きなんですか？

女2 ……

女5 だから言ったじゃない

女4 ね、もう遅いけど。

女2 そうだね。

女1 後悔してる？

女2 してないよ。

女1 ならよかった。

女5 お好きなんですか？

女2 だったはずなんです。

女1 あいまいーまいん

女2 ゆーゆあゆーゆあーず

女3 しーはーはーはーず

女4 ひーひずひむひず

女達のさざなみ、やがてゆっくり消えて

女2 ……静かでした。

女2 水面は、風いでいました。その風いだ水面を風が渡って行きました。その音だけが聞こえた。

女達 (その音を吹く)

女2 私とあなた、あなたと私。似ているようで、違っていて。おんなじところを探してみれば、目が二つある、それくらい。きつと端からそんなもの。知っていたから知らぬふり。知らぬ存ぜぬ見ないフリ。

女2 ……あーあ、だからやっぱり、目が二つあって、よかったなあ。そこだけは、あなたと私、一緒だったね。

女2 揺れることない水の中、私はぼつぼつぼつ、と泡を吐きました。その泡はもう、私の心には映らなかつたのだけど。

女2 私は泡のような歌を歌う。うたかたのうたをうたう。眼球エレジイ。

女2、泡が消えるように、群れの中に戻っていく／ぶくぶくぶく

■女3の場合■

女3が群れの中から声を上げる

女3 そこで、満天の星空。

女3 目の前がね、真っ暗になって、そしたら一面に星が、ぱーって。

女3 まるで、プラネタリウムみたいに。

男の幻影が過る

病院に変わる

女5 お好きなんですか？

女3 え？

女5 プラネタリウム。

女3 あ、いえ、

女5 そうなんですか。

女3 あれがオリオン座かな、あれがさそり座かなーって

女5 あー、

女5 ご存知ですか、星座のお話。

女3 あまり。

女5 オリオン座のオリオン・というのは、人の名前です。

女5 オリオンはギリシヤ神話でいうところの海の神、ポセイドンの息子です。長身瘦躯の美男子で、腕のいい狩人だったと神話には描かれています。

女3 はあ。

女5 しかし彼は思い上がり神々の怒りを買って、神に遣われたさそりの毒によって殺されてしまいます。

女3 はあ。

女5 だから天に上げられ星座になった今も、オリオンはサソリから逃げるのです。だからサソリが東の空に現れる頃、オリオンは西の空に逃げていく。その二つの星座が同じ空に一度に現れることはない。

女3 そうなんですか。

女5 オリオン座が冬の星座で、さそり座が夏の星座、というだけなんですけどね。

女3 先生、お好きなんですか、

女5 いえ

女3 それなのに詳しいんですね、凄い。

女5 いえ、(それほどでも)

女3 じゃあ今度から、参考にしますね。

女5 え？

女3 オリオン座とさそり座は、同じ空に現れない。

女5 ええ、

女3 では、これで。ありがとうございました。
女5 あなたは、また。
女3 とぶん。
女3 沈んでいく。

ぶくぶくぶく／泣いているかのような雨音
女3の夢

男 何を見てる。

女3 ……

男 教えてくれよ、何を見てるんだ

女3 星を見ているの

男 星？

女3 そう、星

男 何言ってるんだ、星なんてどこにも、

女3 だって見て、ほら今日も、満天の星空。

男 わけのわからないこと、

女3 あなたには見えない？

女達 ないないない…

男 ……見えるわけがない

女達 ……ない

女1 わかりあえるわけがない

女3 そうかな

女2 そうだよ

女4 そうだね

女3 でも諦めたくないよ

女2 何を？

女3 同じ星を見たいの。偽物の星じゃない、満天の夜空。

女達 ないないないない…
女4 何で？
女3 だって、

男、女を殴りつける

男 何を、見てる。

女3 星を見ているの。

男 オレには見えない。

女達 なーい

女3 私には見えるの、

男 見えない。

女3 あなたのおかげで

女5 あなたは、また。

男、女3を殴っている／その姿は苦しむ獣のようである

女3 プラネタリウムみたい、…あ。

女1・3 ねえ、先生、嘘ついたでしょ。だってあれはサソリ座で、きっと

あっちはオリオン座。同じ空に出てるじゃない。

女5 それはおかしな話ですね。言ったでしょう、オリオンはサソリから逃げ

るんですよ。

女3 おかしくありません、だってホラ、

男 おかしいんだ、星が見えない。どこにも見えない。君には見えるのか、オ

レには見えない。可笑しいんだ。

女達 ないないないないない…

女3 おかしくない。何もおかしくないの。あなたも何も悪くない。悪いのは私

なの。おかしいのは私なの。

男 おかしいんだ、うまく泳げない。

女3 泳ぐ？

男 うまく息ができない。手足が動かないんだ。もがこうとした端から、絡め

取られて行く。粘着質な波に。

女3 粘着質

男 蜂蜜みたいな
女3 蜂蜜みたいな。

蜂蜜の中、うまく動けない

女3 甘いね。

男 甘い。

女3 ところろしている。

男 もったりしている。

女3 さらさらしている。

男 べたべたしている。

女3 ゆらゆらしている。

男 うとうと、している。

ところろもったり

女3 ……別にさ、私上手く泳げなくてもいいかも。

男 ……え？

女3 溶けてしまえればさ。この蜂蜜みたいな波に。

男 そう？

女3 多分ね、とても楽なんだと思うよ

男 何が。

女3 溶け合ってしまったえば。

男 溶け合ってしまったえば、

女3 隔たりを失くして

男 ひとつになっちゃえば

女3 それって。だってあなたは私でないし

男 オレは君でないし

女3 誰も私になれない

男 オレは誰にもなれない

女3 そうやってひとつになれないから

男 溶け合ってしまったえないから

女3 だからこんなにも私たちは

男 不必要なまでに傷つけあう

女3 余りに不完全なトランスミッション。

男 だからオレが悪いんだ、おかしいんだ。オレが、ごめん、

女3 そんな、

男 星を探していた。澱んだ視界の中、歪んだ水面を通して見える遙か彼方の星を探していた。

女3の夢の終わり、女3は男の首を絞める

女達の心の中へ変わる

女3 泣いているの・悲しいのね・私以上に悲しいのね

女3 あなたの痛み比べたら、私なんて、ちっとも

女3 だから、大丈夫だよ

女4 大丈夫なの？

女2 ちよっと、やだ。

女3 え？

女4 泣いてるの？

女3 泣いてないよ。

女2 泣いてるじゃん、やだ

女3 泣いてないって。

女4 痛いんですよ

女3 痛くないよ

女2 意地張らないで

女3 張ってない

女4 大事にしなよ。

女3 何を

女4 わかってるんでしょ、

女3 うるさいな、聞き飽きた、それ。

女4 だったら大事に、

女3 だったらってなに。意味わかんない、そこ順接で繋げる意味がわかんない

女4 なんて。

女3 聞き飽きるほど聞いたから。

女4 そうね。

女3 だけどそれがどうしたの、私は、

女2 大事に、してよ。

女3 え。

女2 大事に、して。

女3 だから何を

女2 私を。

女4 私を。

女3 ……知らない。

女3 私は、私が大事。大事にしてるよ、それ以上に、彼が大事なだけで。

病院に変わる

女1 馬鹿みたい。完全に負の連鎖、まさにその典型。

女5 ええ。だから、心配してたんです。

女1 そうだったんですか。それはご迷惑を（おかけしました）

女5 いえ、

女1 すごく、みっともないと思います。

女5 みっともない。

女1 なんていうか、ださい。

女5 そんなこと、

女1 みっともなくってださくて、だからすごく、

女5 言っただけです。

女1 え？

女5 それは。

女1 なぜですか。

女5 あなたが心配なんです。

女3、再び病院に現れる／夢の繰り返し

女3 私、何か心配されるようなことを？

女5 目を、開けてください。

女3 え？

女5 ちゃんと見てください。

女3 ……それはちょっと。

女3 失くしてしまったもので。

女5 ……

女3 星だけ見えるの。はっきりと鮮やかに。闇夜の中で、はっきりと、星だけが

女5 ……

女3 見え、やっぱり、目が二つついてるのって、とても大事なことなんだと思

女3 う。だって一つがこうして見えなくなっても私は。

女3 あなたの涙がいつの日か、あの夜空で星になり、私の心を照らすよう、夜

女3 間の中でも迷わぬように、私の瞳を照らすよう。

女3 私の吐いた泡はこうしてうたになって、水面に溶けていくんです。

女3 私たちはきつと、寄る辺ない水棲生物。ぽつぽつと泡を吐いては満天の

女3 星空を想う。プラネタリウム・シンドルーム。

ぶくぶくぶく

女達と男、さらに海の深いところへと沈んでいく

酸素が少なくなっていく

女3、女4に向かって手を伸ばすようにする

女3 世界は、

■女4の場合■

女4 世界は、半直線でできている。

女4、ややあつて客席に向き直り

女4 少し、非言語的な話をしましょう。

女4 直線、というものがあります。直線とは曲線の一種で、端点を持たずどこまでも伸びていく線のことです。

女4 対し最初に挙げた半直線は、端点を持ちます。その端点を始点とし、そこから伸びていくどこまでも続く直線。それが、半直線・です。

女4 世界が半直線であるとするならば、その始点を現在・と仮定します。今この瞬間を始点とし、無限に続いていく半直線、それが世界。(なにかを言ったように見える)

女4 後ろには決して戻れない、過去には決して。何故ならこの世界。(なにかを言ったように見える)は半直線だから。過去は、ない。

女4 目を閉じた私はそんなことを考えていたんです。

女1 泣いているの。

男の幻影が過ぎる

男 泣いていない。

女4 なら、よかった。

病院が変わる

女5 泣いていますか。

女4 泣いてないです。

女5 ああ、ごめんなさい、私が聞きたかったのは、今現在あなたが泣いているか・ではなくて、涙は出ますか・ということなんです。

女4 ?

女5 涙は、波だから。

女4 波

女達 波

女5 そう、心の海が荒れて溢れていっぱいになった時、零れます。コレが零れないとなると、非常にまずい。

女4 どうまずいんですか。

女5 パンクしてしまいますよ。

女4 パンクなんてするんですよ、

女5 海が

女4 心が

女4 まさか、

女5 それかもしくは、

女4 ……

女5 波が全く起きていないか

女1 心が凧いってしまった

女4 凧いってしまった

静寂、眩くように／女4の夢の始まり

女4 罪悪感とかそういうのは、目の前に置かれたカレーライスによく似てるその時私、そう思いました。

女4 汗をかくんです、最初は。舌が針で突いたように痛んで、少しだけ指先が震えます。咀嚼、そして嚥下。咽頭を流れ、食道を滑り落ちて行く痛み。やがて胃の

底に流れ落ちます。落ちた所から冷えてくる感覚がします。神経が、脳に伝えます。恐れる、怯えろ、と。心が震えます、そして脳の命令通りに、恐怖という感情が心を支配します。

女4 でもそんなのは結局一時のもので。私の記憶はいつも簡単にその時の恐怖を忘れます。

女4 だからやっぱり、夙いだ私の海にとっては、罪悪感とかそういうものなんて、目の前のカレーライスと殆ど変わらないのだと、私、思っんです。

女4、まるで心のように不安定、倒れそうになる

女5が駆け寄って支える

病院に変わる

女5 大丈夫ですか。

女4 はい、大丈夫です。

女5 私は、変わらずあなたを心配しています。

女4 心配？

女5 はい、変わらず、ずっと。

女4 ……しんぱいあーるの二乗

女5 え？

女4 身の上しんぱいあーるの三乗

女5 どうしました。

女4 覚えてるもんだなあ、英語は、忘れてただけど。

女5 ……

女4 あいまいみーまいん

女達、さざなみ、口々に

女達 あいまいみーまいん（等リフレイン）

女4 ……サインコサインタンジェント

女達、静まる

女4 何でだろう。数学は苦手なの。

男 何でだよ。

女4 え？

女4の夢に変わる

男 嘘、ついたのか

女4 （首を振る）

男 いいよ、言えよ、嘘でしたって。

女4 嘘じゃない

男 何でだよ、

女4 嘘じゃない。

男 そっちのがよっぽど、残酷だ。

女4 ざん、こく？

女4、男を平手打ちする

男 ……。

女4 ほらやっぱり、泣いているんじゃない。

男 泣いてない。

僅かな間

男 わかっていた、最初から。

女4 何を？

男 人は、嘘をつく。君は、人だ。だから、君は、嘘をつく。演繹法。

女4 ついていないから、そんなふうには言わないで。
男 だってそうだろう、君が。
女4 ねえ

女達、ざわり、ねえねえ／女たちの心の中へ変わる

女4 ねえ私、どうしたらいいの。
女2 どうしたらいいの。
女3 どうしたらいいと思う。
女4 わかんないから聞いてるんでしょ。
女3 でもそんな、ウチらに聞かれても。ねえ。
女2 うん、ちよっとね。ねえ。
女4 なに。
女2 正しい答えは、出せないと思う。
女4 そうなの。
女3 だね。
女4 不便だ
女2 仕方ないよ、そーゆーものだから
女3 だね。
女4 でもさ、三人寄れば文殊の知恵って(言うじゃん)
女2 船頭多くして！
女3 船山に登る！
女4 茶化さないでよ
女3 茶化してないよ
女2 本気だよ
女4 でもさ、じゃあ私どうしたらいいの。
女2 沈黙？
女3 答えは出ない。
女4 昔どこかの偉い人が、沈黙こそが正解だと書いていました。でも少なく

とも今この状況に於いて、沈黙は正解ではなくて、私は遠からず、答えを出さなく
てはならなかったのです。

女2 沈黙はやめよう
女2 議論するの

女2 何の生産性もない
女3 堂々巡りの

女2 答えは？
女3 当然出ないって。
女4 ……そーね。

女達 ねえねえどーすんの、どーすれば、どーしたら、(口々に)
女1 あげるよ。
女達 え？

女1 望む答えなら、あげる。
女達 ……

女1 正しい答えは出せないけど、望む答えなら、あげる。でも、それ、必要？

女4 ……要らない
女1 だよね。

女達、さざなみのように
男 わかっていたよ

女4 ……
男 じゃあ、

女4 ……
女4 ねえ、待って

言葉は届かない。静寂、もしくは喧騒

夢の終わり／男は首を吊って自らの命に終点を打つ
地を這い、やがて獣のように吠え、女に噛みつく

女達 直線、というものがあります。直線とは——の一種で、端点を持たずどこまでも伸びていく線のことです対し最初に挙げた半直線は——を持ちます。その——を始点とし、そこから伸びていくどこまでも続く直線。それが——です——が——であるとするならば、その始点Aを——と仮定します。今、この瞬間を——とし、無限に続いていくそれが——。後ろには決して——。過去には決して——。何故ならこの——だから。過去は、ない。

女1・5 なるほど

女4 ……

女1・5 復讐・ですか。

女4 そんなんじや、

女5 すみません。

女4 いえ。

女4 怖い。私はまだ、

女1 それが一番醜いよ。

女4 知ってる。

女1 じゃあなんで

女4 それは、

男 復讐なのか。

女4 そんなんじやない。

男 そうか。

女4 泣いているの。

男 泣いてない

女4 なら、よかった。

男 泣いていない

女5 後悔していますか。

女4 してないです。

女5 自責の念は、

女4 ないです。

女1 嘘でしょう。

女4 ほんとう。

女1 忘れるの

女4 忘れた

女5 本当ですか

女4 大丈夫です

僅かな間。女5、溜息

病院に変わる

女5 ……狡い人です、あなたに、罪悪感という楔を打ち込んでいった。

女4 そんなことありません。

女5 罪悪感。

女4 はい。

女5 そうですか。

女4 そうなの、だからあなたなんて、私の前に据えられた、カレーよりも軽い存在だったの、きつとただ、それだけのこと。

女4 私は、嘘をついた。

女達 とぶん。

ぶくぶくぶく／女4、ゆっくりと目を開け

女4 私は、間違っていました。世界は半直線では、ない。

女4 有限の長さで二つの端点を有するもの。即ち世界は線分・でした。点Aを始点とし、点Bを終点とする、限りある線分ABという世界。

女4 起点たる点Aは常に動きます。現在。それは変わらない。今この瞬間を起点とする線分。戻れない、もう後ろには戻れない。そしてきつと戻ろうとも思わない。

女4 そしてその線分の終点たる点Bは、ピリオドは、もう既に打たれている。終点は既に決まっている。

女4 でもねその点Bは、打ち直すこともできるんです。自分の意思でもって。
女4 線分B。私はその終点、点Bを打つことに決めたんです。自分の意思のま
まに。

女4 あなたが、教えてくれた。

女5 泳げますか。

女4 え？

女5 あなた、泳げますか。

女4 はい

女5 上手に、泳げますか。

女4 たぶん。

女5 よかった。

女4 私はまた、嘘をついた。

女4 沈んでいく私の周りを、みんな流れていきました。流れていってしま
ました。

女4 いつの間にか止まり続けていた水槽の底。私は動けないのに水は流れ続
け、私の上を流れ続け、そして私を置いていく。

女4 いかないで、いかないで、いかないで……

女4 いかないで、いかないで、いかないで……

女4 そんなんじゃない。と思ったかったただけだ。私はここまで来てなお、自
分を少しでも綺麗なものだと思っていたかったのだ。

女4 ……ごめんなさい。

男 と。ぶん。

再び夢の終わり

女4、男の頭を水槽に入れる

男は僅かに抵抗するがすぐに動かなくなる

女4 消失点、或いは謎え難き君の虚像。

ぶくぶくぶく

女達、まるで波がひくように夢から去っていく

■控室■ 或いは楽屋

男、水槽から顔を上げる／女5がその様子を見ている

男、部屋の隅にあった女1のハイヒールに気が付き、おもむろに履く
どこか気だるげな男と女／初対面であるが初対面ではない

男 お疲れ様です。

女5 あ、どうも、お疲れです。

男 どうです、

女5 まあまあですかね。

男 いやー疲れましたね。

女5 いやほんと、

暫しの間

女5 あのー、

男 はい

女5 いやなんか、すみません

男 何がですか？

女5 結構、ホラだって、あったじゃないですかなんだかんだ出番。

男 ですね。まあ、なかったですけど絡みは

女5 なかったですし実際

男 しかしあのホントのところですけど、自分の出番のあのー多さ、ちょっと
意外だった感は

女5 あ、

男 まあ。

女5 張本人でも

男 はいそんなにだって、ぼく自身思ってたんで。アレーって、

女5 蓋をでも、いざ開ければっていう

男 (笑っている)

女5 どんな気分ですか。

男 嫌ではないんですが勿論、素直に嬉しいかと言われると。そのせいで彼

女は・と考えてしまうんです、ぼくは。

女5 ちょっと感謝しているくらいで。私としては。

男 ……

女5 見せてもらっているような感じですね。貴重な、実に面白いものを

男 悪趣味だなあ。

女5 (照れるような仕草で)

男 誉めてないですからね。

女5 アレ、怒ってるんですか？

男 怒ってもないです。

女5 そうですか

男 はい。

男 僅かな間

女5 随分なんか薄くなっちゃいましたね。

男 なにがでしょう。

女5 揺らぎが。

男 ここにこうしているってことはそう言った揺らぎを失くすということ

だとぼくは思うんですが。

女5 ……

男 それだけでは勿論ないんですけどね。

男 ほら、(水槽を見るような仕草)

女5 こーゆー所には、つきものですからね。

男 ……

女5 心を静める効果があると言いますか

男 それ

女5 はい？

男 その効果・の所為で今ぼくの心はこんなにも凪いでいるんだと思うん

ですが、どうでしょう。

男 僅かな間

女5 やっぱり。

男 ぼくが子供の頃通っていた病院にもね、こういう水槽がありました。

女5 やっぱり。

男 一つはね、ネオンテトラやなんか小さくてキラキラした魚がいっぱい泳

いでいる、キレイな水草で整えられた水槽。溢れる緑の影から宝石みたいな魚の

鱗の翻るのが好きだった。もうひとつは、こんな大きな魚が一匹だけで泳いでい

る水槽。その水槽はなんの飾りも無くてね、ただ、その魚だけがいた。寂しくもあ

り、荘厳でもあった。そうして、一番小さな一つは、

女5 待って、

男 ？

女5 私に当てさせてください。

男 どうぞ。

女5 その一番小さなサイズの水槽には……小さくて赤い金魚がいっぱい

男 ……

女5 当たりましたか。

男 正解です。

女5 やっぱり。

男 どうして(わかったんですか)

女5 簡単な話ですよ。生き餌・です。
男 いきえ？

女5 その大きな魚、多分、アロワナあたりだろうと思うんですが。肉食魚なんですよ。で、たくさん小さな赤い金魚。そいつらはみんな、そのアロワナの・餌なんです。確かに肉食魚とはいえ、今日日勿論乾燥餌だって食べますよ、でもね、そのうち食い付きが悪くなる。

男 ……

女5 そういう時に、生き餌の出番です。いえね、なかなか楽しいものですよ、アロワナの捕食。こー、金魚がぼちゃんと、そこにね、がばっと、こー（変な動き）

女達 やめましょう

男 やめましょう

女5 え？（変なポーズのまま）

男 そういう話、やめましょう。

女5 今揺らぎましたよねあなた。なぜ、そんなにまで怯えるんですか？

男 世界を、見せられているようです。それはとても怖い。

女5 ……捕食の話？

男 はい。

女5 ……

男 やめてください、ぼくの思い出をそういうので穢すのは。

女達 ぼくの思い出を

そういうので汚すのは（笑う）

女5 星になってなお、怯えますか。

女達 星になってなお怯えますか

男 悪いですか。

女達 悪いですか？

女5 いえ全然。オリオンですら、未だにサソリを恐れますから。

女5 苦労しましたね。

男 ……

男 ……

男 ぼくはその待合室で、いつも水槽を見ていた。

女5 ……

男 ずっと見ていられた。

女5 ……落ち着くんでしょう、本能的に。

男 落ち着く？

女5 例えば深く湯船に浸かっている時、プールに潜っている時、海を揺蕩っている時。言い表しようのない、安心感。包まれているような、抱き締められているような、安堵感。

男 ……

女5 いわゆる回帰願望の一種なんじゃないかと、私思うんですよ。

男 ……

女5 イキモノはみな、水から生まれました。深い海の底から。

男 ……

男 はい、

女5 そして私たちは、この世に生まれてくる前に、母親の胎内で羊水に包まれ抱き締められて、十月十日を過ごします。

男 ええ、

女5 （男の身体を指し）60パーセントは水分と言われていますし。

男 ですね。

女5 そういうことになりますね。

女5 私たちは水から生まれ、水へと還る。これは、これだけは等しく同じ。

男 ……詩人ですね。

女5 安心しました。

男 ……

女5 必然だったということが、わかりましたから。

男 ……

女5 何がでしょう。

男 ……

女5 ぼくが、ここへ来たこと。

男 ……

女5 自ら終点を打たなくても、いずれ来ていた場所・なんででしょう。

男 ……そうですね。

男 だから、安心しました。

女5 でも、それでもかわりは無いですよ。

女達 あなたは逃げた。

女5 線分Bの終点たる点Bを、自分の意思でもって。打ってしまった。

男 ……わかっています。

女達 わかっています。

女5 別に責めてないですよ。

女達 ねえねえねえねえねえ

男 それも、わかっています。

女達 ねえねえねえねえねえ

女5 なら、いいんです。

間 おや、

女5

水槽が男を呼んでいる。女5はその場から去る。

男は女1のハイヒールを脱ぎ、海岸に立つ

海へ飛び込む

海が男の命を奪い、波が男の体を砂浜に打ち上げる

女1の夢

夕暮れの海岸に女1が立っている

足元に動かない男のからだがある

女1は男に尋ねる

女1 呼びましたか

男 今、呼びましたか

女1、男のからだを抱き上げる

女1 ええ、

女1、電車に乗って帰る／一度だけ海を振り返る

■ 女1の場合 ■

歪んでいく女の日々をなぞるような連続した光景

女達 (バラバラに) 器の話をしましょう。私と言う肉の器、私と言う鉛の心

の話です。聞いてくれますか。

女1 空っぽでは無い、

女達 でも満たされてもいない、

女1 ちゃぶちゃぶと音を立てる器。

女達 何が入っているの？ ねえねえねえ

女1 何が入っているのか

は、私にはよくわかりませんでした。

女1 器を傾けてみました。

女達 器。 私と言う鉛の心の話です。聞いてく

れますか。何が入っているの？

女1 60パーセントの内容物はとろんとろけて器を揺らし、

女達 60パーセントの内容物

女1 しかし溢れることは無く、そのまま流れに身を任せ、するりと落ちて行

きました。

女達 何が入っているの？

ントは水分と言われています

女1 私は結局最後まで、地を這うけもの、悲しいほどに、力無く、重力だけに、

縛られて、私は結局、最後まで

女達

力無く、重力だけに、縛られて、私は結局、

女達 とぶん
 女1 沈下、次いで浮上
 女達 そこは静かで、暗くてあたたかかった。
 女1 怖くはなくて、不安も無くて、それどころか少し、安心さえもした。
 男 やあ
 女1 ……また、お会いしましたね。
 女3 ……お好きなんですか、プラネタリウム。
 男 こんなところで会うなんてね。
 女4 ……すみません、お取り込み中、いえ、お取り込み中でしたか？
 女1 奇遇ですね。
 女3 ……泣いているの
 女2 ……泣いていない
 男 確かに。奇遇だね。
 女1 あなたはなぜここへ
 男・女達 忘れたの？
 女1・女達 いいえ、
 男 覚えていない？
 女1 知らないの。
 女2 ……いいよ、言えよ、嘘でしたって。
 男 忘れたの
 女3 ……嘘じゃない
 女1 いえ、忘れてはいない、
 女達 知らない筈もない。
 女1 私は、
 女達 追い掛けてきたのだ。重力を忘れ、私を忘れた、ひとを。
 男 会えた？
 女1 (息をしない)
 男 わかんない。
 女1 そう。

男 なんてそう思うの？
 女1 私の心がまだ、重力を覚えているから。
 女達 憔悴しきった女1、自ら死のうとし、しかし未遂に終わる
 女、いつもの駅で降りない
 やがて、電車が海辺の駅へ辿り着く／電車をおりる
 女達 お好きですか？
 女1、振り向くと女達が小さく笑いあっている
 女1、おずおずとその輪に近付き
 女1 お好きですか。
 え
 女1 こういうの、お好きなんですか。
 女達 ええ、私好きです。
 女1 私も、好きです。奇遇ですね。
 (笑う)
 女1 ……あの、どこかで
 女達 どこかで？
 ……いえ、何でもないです
 (笑う)
 女1 ずっと、見ていた気がしました。
 女1 少しだけ、違うように感じた。見ていた・と言っつのは。
 女3 そばにいた
 女1 え？
 女4 ともにあった
 女2 ずっと、よりそっていた
 女1 ……はい。

女達 だからこうして、水を見てみると、洗われるような気がするんです。

女4 何が

女2 心が

女3 何が

女1 澱んでいた、全てのものが

女達 (笑っている)

女1 そうして夢を見ます。

女達 ゆめ(口々に)

女1 夢。

女1、海岸に立つ

女1 水面を滑る風のような

さざ波にすら震えるような

揺蕩う水草と戯れるような

52ヘルツの孤独のような

光をうつす鱗のような

海底の汚泥のような

餌を待つ肉食魚

餌になるのを待つ金魚

朝陽に目をしかめるような

夕日に涙するような

蜃気楼に手を伸ばすような

闇にしか生きられない魚のような

キャンバスにぶちまけた絵の具のような

真白が塗り潰されてくような

心が塗り潰されてくような

二万マイルの静けさみたいなのーチラス号の見る夢

メリー・ゴー・ラウンド

流される葦のような

流れにもまれ、それでもなお根を張る葦のような

ロム・エ・タン・ロゾ・パンサン

二等辺三角形の不文律

平行四辺形の加減乗除

しんぱいあーるの二乗

みのうえしんぱいあーるの三乗

荒波に飲み込まれるひとのような

藁を掴みながら丘を上るような

ウイム パティオル

ウイム パティオル

宇宙にも似て広がりに続け

星座みたいに遠ざかる

シャーレの底の銀河のような

進化論の始まり

生命のスープ

海に降る雪のような

ハロゲンランプの光のような

うたかたのまぼろしのような

自分が、魚になったような

なんの不自由もなく

心のままに

泳いでいけるような

夢

夢

夢

女1 それはとても心地好い夢。でも私には水かきはないんです。鰭もないです。鰭もないんです。だからどうしてもうまく泳げなくて。鰭もないです。鰭もないです。鰭もないです。鰭もないです。

女2 不自由な体。

女4 不自由な心。

女1 だから、私の心は鉛を飲んで。

女2 飲んで

女4 飲んで

女3 飲んで？

沈む

女1 私は、好きです。

女達 私もです。

女1 私は、好きです。

女達 私もです。

沈む

女達 水に棲む私の涙は、望み通り波が溶かしてくれました。人間の体の60パーセントは水分でできている。その水分が全て溶けだしていくのを感じました。水溶性の私。心が、体が、透過されていく。そして、

女2 ゆれて

女3 ふれて

女4 きえる

女1、海に飛び込む／この物語の始まりと同じ場面

女達

流れる水、流れる水、流れる水
川のように、海のように、想いのように、泡を立てながら流れる水
それは私のように私でなく

あなたのようにあなたでなく
誰かのように誰でもなく

でも愛しくてたまらない あなたと私のものごとり
見つけた。

水底／男がいる

女1 ……見つけた。

男 ……私はいない。

女1 ……私は

男 ……私はいない？

女1 ……私はいない？

男 ……私はいない？

女1 ……私はいない？

男 ……私はいない？

女1 ……私はいない？

男 ……私はいない？

女1 ……私はいない？

男 ……私はいない？

間

女1 その時私は水を見ていました。本当は、無色透明な筈の水、私の心持ちに

より、変幻自在に変わる水。捕らわれない、掴めない、捕えられない。私の掌を、か

ざした掌を、撫ぜるように舐めるように通り過ぎていきました。

男

女1 ……ばかだな

女1 ……知ってる

間

男 水に憧れ恋い焦がれるのはぼくたちの性だ。

女1 うん

男 でも、忘れてはいけない。

女1 何を。

男 重力を。

女1 なんて、

男 それは君を縛り付ける何か。そして同時に、君を生かしている何か。

女1 でも、私もう、（忘れてしまいたい）

男 だめだ

女1 え。

男 それは、言うてはだめだよ。

女1 ……

間／波のはざまから歌が聞こえてくる

男 君は、ずっととうたっていたね。

女1 知ってたの。

男 ああ。ずっと聞こえていたよ。

女1 あいまいみーまいん

男 そう。

女1 そうなの。

男 ぼくはこの波の狭間から、君を見ている。歌を歌っているからね。

女1 それは、呪い？

男 （小さく笑う）馬鹿だな、祝福だよ。

女1 そーゆーもの。

男 そーゆーもの。

女1 そっか。

間

男 もう、いきなよ

女1 いかなきゃだめ？

男 だめだ

女1 ……さよなら。

女達 さよなら（口々に）

ぶくぶくぶく／さざなみ、やがて。

全員

はなれていく 私たちははなれていく

流れていく 流れていく 私たちは流されて行く

水の中、溶け合っていた小指が、

私の形をもって、あなたの形とほどけて

波に乗って はなれていくのが見えた

それは、手を伸ばしても届かない

あなたという隔たり 私という隔たり

心もとないハロゲンランプの

小さな明かりの粒の中

いくつも泡を、吐き出しながら

肺の中身をさらけ出し

それでも小声で囁くように

あなたのために、うたうた

うたかたのうた、水棲の、アリアのようにうたうた

女1 ソットヴォーチェ。

次第に遠ざかっていく水の音

■診察室■或いは楽屋

水底から浮上した女1、目を覚ます。
生きている。

女5 お待たせしました。

女1 ……

女5 いかがですか。

女1 ……

女5、診察をしようとするが、やがてその手を下ろし

女5 ……やめましょうか、

女1 え？

女5 取り敢えずのところそれだけで充分です。

僅かな間

女5 ……もう、戻ってらっしゃらないかと思いました。

女1 私は……はい。

間

女1 私ね、歌を歌っていました。水の中を揺蕩いながら。

女5 ……

女1 目が覚めるのが怖かった。彼を忘れてしまいそうだから。だから目覚めないように、

女5 ……

女1 でも彼が、

女5 ……

女1 そうなんだ、とどのつまり私は、覚えていたいのだ。あなたを愛せたということを。こんなにまであなたを愛せたということ。

女5 さあ、目をあけて。

女1 (歩き出す)

男 行っってらっしゃい。

女1 (振り返る)

女5 ……

女1 行っってきます。

女1、前を向いて歩いていく

ぶくぶくぶく、残された者たちの歌が聞こえる

舞台はゆっくりと暗転

幕

【上演記録】

2016年6月3日(金)～6日(月) 於 阿佐ヶ谷アーティストスペースプロット

【スタッフ】

脚本 犬井ねじり(salty rock)

演出 立夏(獣の仕業)

音響 新直人(salty rock) 照明 伊藤将士

舞台監督 中園良輔 宣伝美術 塩澤亜美子

制作 しむじやうく 企画製作 salty rock

【キャスト】

女1 きええる

女2 まひいゆか

女3 野崎涼子

女4 小林カナ

女5 伊織夏生(salty rock)

男 川原翔

【salty rock】

Mail : saltyrock.ac@gmail.com (上演に関するお問い合わせはこちら)

HP : <http://unitsaltyrock.web.fc2.com/>

Twitter : @salty_rock